

2021年12月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

円窓に切りとる秋の輝けり	仁田 浩
とどこほる世をひたすらに秋遍路	朝井 玲子
菩提の実墓口開けて拾ひをり	野木 正博
自死の友思ふ夕べや吾亦紅	中井 昭雄
復元の鐘のこだます盆の寺	佐々木 成
凭れ合ふ石仏なり露しとど	木村 静子
メダル手にはにかむ女兒や草相撲	小寫 和
秋晴や会議の声のよく届き	富沢 壽勇
赤とんぼ負はれし姉の三回忌	植田 清子
古りし家に出入自由の虫あまた	加藤かず子
桐一葉土偶の兵のいかり肩	立石 律子
千の風になつて流るる翺雲	友永基美子
義父宛の赤紙の褪せ秋彼岸	中野 梓
今宵書く梶の一葉のねがひ哉	西五辻芳子
秋晴や村の子供は外に遊び	福地 義雄
雨月とて翌朝西にくつきりと	山中ひでの
月天心比叡の山の揺るぎなく	片山 旭星

伝言は小声に申すすがれ虫	河村 純子
塩梅のよき漉し餡よ秋うらら	古川 邑秋
山繭の日差しに伸ぶる金の翅	福江ちえり
長雨や合羽着せられたる案山子	大石 高典
気配あればつい見てしまふ穴まどひ	益子 桂子
蒟蒻をさしみとしたり月見酒	森川恵美子
秋風の汽笛のせくる浜離宮	城戸崎雅崇
秋風の吹き抜けてゐる関ヶ原	中村 順次
指揮棒を構へるやうに子蠶螂	大野 邦夫
朽ちかけし土蔵のことを稲架日和	小堀 恭子
二メートル跳ぶかや飛蝗逃ぐるとき	田辺美千代
海の音遠くにありぬ月の宿	中西 則雄
目玉まだ蒼きに死するおにやんま	前田 鈴子
稲を刈る音反響す山の村	山口 容子
初百舌鳥のこゑに背筋の伸ぶる朝	山田ミチ子
かなかなに背を押されゐる滑り台	佐藤 慎一
夕蟬や何も売れずに店ひと日	谷口 文子
秋夕焼二上山に色を置き	細見 昌代
新聞を小脇に朝の栗拾ふ	小川 妙子



名月や雲のあそびに気を揉んで 杉本 伸一

2021年11月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

語り継ぐことご法度に水喧嘩	仁田 浩
盆荒や納屋の中なる釣道具	朝井 玲子
八月や銃痕ありし父の脛	古川 邑秋
宿坊のはしやぐ坊主子夏休	南田美恵子
盂蘭盆会マスク越しなる読経かな	大石 高典
機とともに成すとふ上布織る媼	栗本 徳子
天気図の端から端へ油照	河村 純子
東京の焦土より 富士終戦日	川上 和昭
海の日や吊されてあるゴムスーツ	益子 桂子
妙法の炎は一つ小雨降る	片山 旭星
教会の鐘よ泰山木の花	西五辻芳子
送火の闇のむかうにありがたう	栗本 一代
深閑と物音潜む炎暑かな	植田 清子
終戦の日や女子学徒一人逝く	福地 義雄
燕帰る残せしものを後始末	藤本 隆子
終戦日父母の痛嘆知らざりし	森 幸子
樺太へ渡りし漁師の墓洗ふ	佐々木 成

耳塚の辺り激しき虫の声	谷口 文子
中腰へ水鉄砲の流れ弾	佐藤 慎一
台風を支へ付けたき老大樹	田中 勝
押黙り灯籠流す原爆忌	碓氷 芳雄
祖母の背の港にしやがむ茄子の馬	石田 祥子
胸がすくほどの根強さ草むしり	斎藤よし子
蝸に一夜の宿を貸しにけり	石原ゆき子
祖父の釣竿そのままよ震災忌	鴻坂 佳子
ゆらめきの陰の深さよ夏木立	佐藤 聡
棚経や草履の小僧小走りに	木村 静子
聞き取れぬ防災無線秋暑し	真下 章子
御巢鷹の祈りの日数早星	森川恵美子
カシュー塗乾く初風神楽笛	丹羽 康夫
霧引かず雪加は川面巡回す	坂 利美
八月や軍事手帳に父のメモ	大野 邦夫
海の子の潜り納めや秋に入る	小堀 尚美
両腕に抱へ初採り西瓜かな	山口 容子

行水てふことにひかれて盥出す	山田ミチ子
提灯に子の名ずらりと地藏盆	荒木 昭代
初秋や川の暴るる音に覚め	小川 妙子

2021年10月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筧 集

棟梁の耳に鉛筆梅雨明くる	大石 高典
鈴木家の柘榴たうたう伐られけり	中井 昭雄
新しき人移り住む青簾	鈴木 春菜
仏壇の前に寝かせる南瓜かな	西村みゑ子
山鉾の建つや巡行なけれども	小 崑 和
星飛ぶや母は戦中語らずも	志多伯節子
外国名増ゆる礎石よ沖縄忌	知念 幸子
野外映画ありし昭和や夕涼み	中野 梓
余生なほ祈る夏越の祓かな	長瀬 朋孝
七夕や病床に追ふ星の数	福地 義雄
畑仕事の背ナを押すがに蟬時雨	本多 智恵
糠床のとつぷり漬かる熱帯夜	山本 真也
峰雲へヤッホーと声大にして	山中ひでの
小袋の金魚揺らさぬよう家路	碓氷 芳雄
君が肩越しにそびゆる雲の峰	森 壹風
真夜中の木を見上げれば蛇そこに	田中 勝
片蔭にすつぽりと入る山の駅	真下 章子

茄子漬の色にこだはる売子みて	南田美恵子
畦道は母の通ひ路杜若	佐々木 成
火入れせる蕎麦の畑に蝮出て	丹羽 康夫
夏草や一本道は鉄路跡	片山 旭星
歌声の夜空を仰ぐキャンプの火	櫛淵かりな
短夜や残り一行にて止まる	森川恵美子
葛餅の包みは心地よき重さ	城戸崎雅崇
白南風や恋路ヶ浜の芭蕉句碑	中村 順次
六根清浄御山は晴れて夏の富士	原田久仁一
木のうろを煽ぎ唸るは夏の蜂	宮原亜砂美
夕焼やころころ遊ぶ雀二羽	松澤 博子
一畝に起こされ惑ふ大蚯蚓	小堀 恭子
戸を開けて祭囃子を呼び込みぬ	小堀 尚美
夏山の重なり合うて三方五湖	田辺美千代
逝きし子と遊びし海よ夏が過ぐ	前田 鈴子

草むしり終の時まで続けたし	森 幸子
空蟬を探す子の目になり探す	石原ゆき子
蟬の殻潰さぬやうに両手出す	佐藤 慎一
金魚柄の暑中見舞よ青インク	石田 祥子
ヒロシマや炎天けふの太田川	小川 妙子

2021年9月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

夜の雷や回峰行者山に入る	栗本 徳子
金魚藻のゆらりと尾鰭あるごとし	朝田 玲子
五月晴破れデニムの膝小僧	仁田 浩
万緑の隙ひまにあり茜雲	小畠 和
鳧鳴くや鎮守の森の中にまで	古川 邑秋
梅雨寒の細き灯流れ神田川	鴻坂 佳子
浸す手に疲れ消え去り夏の山	益子 桂子
桐の花あたりを祓ふごとくあり	中島 冬子
裏方は花殻摘みや菖蒲園	川上 和昭
女房の捌く釣果の鱧一尾	西村みゑ子
家籠り庭先に吊るハンモック	西五辻芳子
蟬鳴くや七十五年戦跡地	福地 義雄
額の花売物件の多い町	山本 真也
夫の摘む桑の実いつもジャムとなり	大野千鶴子
雨だれの落つる梅雨入の三和土かな	田中ミヨ子
一人とて会はぬ町なか枇杷熟る	中野 梓
注射痕かすかに痛む梅雨寒し	森 すゞ子

きのふとは違ふ青田やこふのとり	森 幸子
昭和まだ生きてあるなり草田男忌	中井 昭雄
別人を気取るレースの手套かな	谷口 文子
校庭の白線薄れ梅の雨	碓氷 芳雄
じつとしてゐるも刻過ぐ蝸牛	大野 邦夫
降り続く雨は蒼しと七変化	田中 勝
閉校のプールめだかの学校に	山中ひでの
ででむしや探鳥会は息潜め	南田美恵子
運河行くボートのへさき犬の席	木村 静子
紫陽花やかくれんぼの子見えてをり	佐藤 聡
未草うたたねの間に咲きにけり	吉田 達哉
睡蓮や池の手本にモネの額	田辺美千代
さつき咲く四人となりしクラス会	中西 則雄

十分間待てず夕立のなかを行く	石原ゆき子
紫陽花や友禅型紙透かし見て	国兼 弓華
軟膏の手を逃げ回り汗疹の児	佐藤 慎一
鮎を焼く夫は香りを利きながら	細見 昌代
流螢やいつしか我も宙を舞ふ	山本 京子
古株を腰掛として木下闇	長瀬 朋孝
梅雨晴やロックカフェとふ赤い屋根	小川 妙子

2021年8月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

傷冷やす蛇口のしぶき夏隣	朝田 玲子
夏近し瀬戸をぬけゆく機帆船	仁田 浩
お浄土といふ岸へ向け泳ぐなり	川上 和昭
足跡のごとくサンダル散らばつて	鈴木 春菜
くたびれし牡丹の上に牡丹哉	大石 高典
草笛吹くたびに音色の異なりて	古川 邑秋
老鶯の声の入り来る坐禅堂	佐々木 成
露のみを残す子のゐてお弁当	三原真紀子
旧道の底に初夏のとろろ飯	小寫 和
さつぱ舟の竿の先まで新樹光	益子 桂子
整ひし田面の水に螻蛄のかほ	野木 正博
浜風や深紅の薔薇に王妃の名	植田 清子
蛙鳴く田の水をわがものとして	片山 旭星
篝火の闇にほひたつ栗の花	栗本 一代
風を捲くショールのごときさをがせ	志多伯節子
白玉や若かりし日は指白し	田崎セイ子
家猫の仔猫啜へて戻りけり	田中ミヨ子

語らずに去りし母なり沖縄忌	知念 幸子
生くることは大仕事なり聖母月	友永基美子
薔薇剪りて濡れたる袖に香の残り	長瀬 朋孝
いそいそと三分ほどなり燕の巢	西五辻芳子
幼ナの採る色づきかけしさくらんぼ	藤本 隆子
友は皆アルバムのなか新茶汲む	本多 智恵
葬送の道に寄り添ふ花蜜柑	前田 鈴子
その昔二階は蚕屋よ朴の花	真下 章子
医者通ひ段落のごと花あやめ	村木 道子
馬酔木咲く伊勢神宮の火除橋	森 すゞ子
振り向くでないぞと恃み青大将	宮原亜砂美

大樹なり戦後に植ゑし樟若葉	田中 勝
枝の目白籠の目白を誘ひ鳴く	田中ミヨ子
老の手も欲しきと言はれ茄子の苗	酒井 富子
溪谷に茶屋の在りしよ鮎の竿	森川恵美子
抽斗の滑りの軽し更衣	大野 邦夫
鶯の声だしぬけに野辺の道	中西 則雄
ほたる待つほたるの里のわらべ唄	山田ミチ子
打ち鳴らし青嶺に響くサヌカイト	林 剛
海峡の渦を隣に若布売	細見 昌代

2021年7月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

頬白の啼き交はしゐて籠の鳥	川上 和昭
摘んで愛でつんで一と日を野に遊び	中島 冬子
藤咲くは平等院を一として	河村 純子
青麦に風紋つつと急ぎをり	野木 正博
壺焼や身を回し抜く串加減	朝田 玲子
ちひさきを扱ひて夕餉の桜鯛	三原真紀子
新興地に昔偲べば蛙鳴く	中井 昭雄
たけのこ掘る今日の仕事と寺男	大野千鶴子
白詰草咲きて離宮は野辺めきぬ	片山 旭星
ゴンドラが空を行き交ひ山笑ふ	栗本 一代
鶯不動くるくる動く花筏	友永基美子
食べ頃は手が知つてをり豌豆摘む	西村みゑ子
春キャベツ手にやはらかき重さかな	森 すゞ子
子を訪ふに春の筍掘り上げて	森 幸子
東山の懐に入彼岸かな	古川 邑秋
鐘鳴るや修二会の衆の走る音	西五辻芳子
新入社員用心棒の面構へ	吉田 達哉

玄関の灯しに浮かぶ染卵	丹羽 康夫
目借どき手の甲つねり会議中	森 壹風
罫やピザ伸す板は大理石	木村 静子
初心者の田起し見張る鶯と鳩	宮原亜砂美
オルガンの音懐かしむチューリップ	酒井 富子
電線の高所作業車風光る	益子 桂子
妙義山の岩場重なり八重桜	森川恵美子
花換や金の烏帽子の福娘	小堀 恭子
花筏分けて汲み取る供へ水	田辺美千代

針金と紛ふまで干す蕨かな	前田 鈴子
苗床の競ふごとくに二百箱	山口 容子
朧夜の影のら猫の遠慮げに	山田ミチ子
海しづか妻が舵取る浅蜷舟	山中ひでの
囀や反り返る児の齒の白し	佐藤 慎一
競ひ立つビルは黄砂に巻かれをり	林 剛
桜咲く一の舟入舟は朽ち	細見 昌代
春寒し人事異動の胸騒ぎ	石田 祥子
居ながらに雲雀のこゑを聞く職場	塚本 郁子
灯台の足場守りか犬ふぐり	田崎セイ子
池の鯉数ふる日課水温む	田中ミヨ子

2021年6月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

啓蟄や都会に老いて虫怖し	仁田 浩
仔を背負ひクモザル春の空渡る	小畠 和
踏ん張るぞモッチョム岳の春疾風	野木 正博
草餅を搗く掛声や湯気の跳ね	古川 邑秋
つちふるや昔の話ぶり返し	富沢 壽勇
対の貝をさなと描く貝合	西五辻芳子
木のうろの深きしづけさ春の雨	朝田 玲子
芝青む古墳のぬしの名は知らず	川上 和昭
縄締め土のこぼるる植木市	中井 昭雄
一湾に動かぬ基地や松の芯	志多伯節子
すみつこに稚のを見つけし年の豆	中野 梓
嫁ぎ来し時より門の桃の花	森 幸子
海棠に雨戸閉ざす手滞る	村木 道子
涅槃像にぬかづく母の背ナまるし	佐々木 成
梅日和ひねもす猫とのたりゐて	河村 純子
椿落つる音に仔猫の身構へて	小川 妙子
囀は窓の外よりラジオより	石原ゆき子

鶯のこゑに雀に枝の揺れ	田中 勝
笑ひ声校舎に戻り金盞花	宮原亜砂美
囀りのなかよ新聞めくる朝	小堀 恭子
だしぬけのやかんの笛よ花曇	木村 静子
須弥壇に二十五輪の椿かな	片山 旭星
春昼や尻尾枕に猫丸む	櫛淵かりな
在宅の仕事の日々や花曇	佐藤 聡

ビルつなぐ回廊のあり春の川	城戸崎雅崇
淡き香を放つよ椿落つるとき	中村 順次
末つ子は末つ子同士目刺焼く	吉田 達哉
昨日になき土筆ありけり避けて行く	小堀 尚美
大地割れ飛び出す蛙ひとつ飛び	田辺美千代
亀二匹うろに隠れて春の川	中西 則雄
野遊びや二歳に影の不思議あり	前田 鈴子
父の植ゑし木瓜の花なり声かけて	山口 容子
夕霞む湾をゆるがす汽笛かな	山中ひでの
春の日や一つ飛ばしの石畳	笹田 昌孝
鐘霞む古墳築きし国のこと	林 剛
比良八荒湖面に雲の迫り来る	細見 昌代
火砕流に焼けし田畑よ蕨萌ゆ	杉本 伸一

2021年5月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

雪下し疲れし村を星の数	佐々木 成
梅が香をまづ呼び込んで厨ごと	中島 冬子
子規が居し漱石が居し伊予の春	川上 和昭
小浜湾へ釣糸垂るる春の風	野木 正博
明日香よりの春の摘菜のほろ苦し	栗本 一代
風音を聞き酌む酒よ春寒し	片山 旭星
大寒や山羊鳴いてゐる河川敷	志多伯節子
卓上に消しゴム屑や受験終ふ	立石 律子
春の波閑けき浜に我一人	知念 幸子
花の種蒔いて花の名忘れけり	友永基美子
春や春手提げ鞆の重くなり	中井 昭雄
薔薇の芽のアーチに上がる息吹かな	長瀬 朋孝
閉校の庭に球音春きざす	中野 梓
次々と耕されゆく干拓田	藤本 隆子
笹鳴を参拝客の探しゐる	森 すゞ子
浅春の橋に欄干なかりけり	南田恵美子
縫ひかけの刺繍広げむ梅月夜	朝田 玲子

ヒヤシンス私の時間あと五分	真下 章子
杉戸絵の唐子戯れうららけし	木村 静子
干からびし贅の枝揺れ春の雨	宮原亜砂美
鹿の息あり飛火野に寒戻る	古川 邑秋
おしくらまんぢゆう誰となく増ゆる	西五辻芳子

冴返る鼻のつるりと大天狗	益子 桂子
暇乞ひして去り難し梅の庭	酒井 富子
梅咲くや崖屋造の宿場町	森川恵美子
寒雷や欠けたるパズル埋むたび	斎藤よし子
茅葺のころのありけり露の臺	大野 邦夫
豆まきや当てられにゆく鬼の役	小堀 尚美
唄ふたび春のうるほふ早春賦	田辺美千代
作柄の良し悪し探る梅見かな	前田 鈴子
梅の剪定昔どおりよ黙々と	森 幸子
歩まねば老ゆると誘ふつばくらめ	山中ひでの
節分や檜葉の煙の猛々し	石原ゆき子
冬ざれや遺る仏に仮の宿	林 剛
ふらここや子らに届かぬ母の声	南田美恵子
大人味とぞ鯛飯に山椒の芽	石田 祥子
目白来る餌に一羽来て守る一羽	本多 智恵

2021年4月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

西行の詠みし桜の返り花	佐々木 成
棒鱈を戻す日数や年の暮	栗本 徳子
伊勢道や牡蠣と干物を買初に	三原真紀子
夫の友なりと賀状に馴染みけり	朝田 玲子
新しき箸置に箸置く二日	鈴木 春菜
雪解の流れ一筋雲母坂	片山 旭星
ふるさとはいま菜種咲く仁淀川	栗本 一代
日めくりの元日おらが一茶の句	酒井 富子
鳥鳴くに岬は晴れず小豆粥	志多伯節子
鬼の子の冬は何処や目文字なし	友永基美子
積む雪を吹きとばしたり漁場の風	中井 昭雄
生かされて生きて九十二今朝の春	長瀬 朋孝
縫初のきりりと張りぬ刺繍台	西五辻芳子
冬帽に車窓の風や参考書	碓氷 芳雄
腹ペこの栗鼠のあつまる枯木立	宮原亜砂美
広島や牡蠣の外せぬ雑煮椀	田中 勝
褻着なれど過ぎてゆくなり松の内	富沢 壽勇

洞門の昏さ駅伝走者抜け	小 寫 和
もう少し生きてみようか桜餅	斎藤よし子
牡蠣割りし父の破顔や夕餉の香	牧田満知子

ローカル線の扉開くたび寒四郎	森川恵美子
観覧車動かざると雪催	城戸崎雅崇
春待つや電話診察受けてみて	中村 順次
凍結に低速となりスポーツカー	吉田 達哉
隙間風閉ぢこめらるるより易し	坂 利美
元日やよそゆきなれど家に在り	森 幸子
破魔矢受く若狭国の一の宮	山田ミチ子
真夜中の天井揺るる雪起し	大野 邦夫
湯豆腐のゆらりゆらりと角の数	田辺美千代
いつもなり寺の法事の隙間風	荒木 昭代
画面越しの講演を聴き冬籠	石原ゆき子
一月や酒饅頭の湯気旨し	大野千鶴子
さよならを百回言へば雪ちらちら	小川 豊子
鴨三羽羽搏ち波打ち日射し濃く	石田 祥子
顔洗ふ猫は初湯の蓋の上	小川 妙子
新玉の年や餃子を包む愚痴	中野 悦子
駅伝のあとの勢ひ筆始	山本 京子

2021年3月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

白息をととのへてより案内乞ふ	仁田 浩
くつさめにくさめ餅す夜のしじま	富沢 壽勇
清き水飲めぬ国あり寒北斗	古川 邑秋
牡丹焚く炎みちのくとほきとも	西五辻芳子
木枯や母国に帰る老神父	佐々木 成
冬苺ほろほろ零しかくれんぼ	前田 鈴子
旅人の歌の檜の木冴ゆる鞆の浦	木村 静子
小春日の遠音は叡山よりの鐘	野木 正博
手の届くところに寒の芹を見て	南田恵美子
家籠り着ぶくれ癖のつきにけり	山中ひでの
点滴のままならぬ夜の寒さかな	加藤かず子
マリ国の藍染の布あたたかし	栗本 一代
重ね着の身をほどきけり通夜の席	田崎セイ子
いづこの国より来し波か小春空	知念 幸子
灯火管制鼻鳴けば妹が泣き	友永基美子
殿の一羽ちひさし鳥渡る	中野 梓
冬枯の鉄路の音よ街の灯よ	碓氷 芳雄
湯気立ててにはかに歳を取る心地	真下 章子

遠眺む愛宕比叡に雪のあり	藤本 隆子
白味噌の好きな父亡き今朝の春	三原真紀子
妻にやたら話しかけみて年の暮	林 剛
歳晩やカーラジオよりヒット曲	田中 勝
大雪のニュースに町の名の馳せて	酒井 富子
山茶花のこぼれて白き背戸屋道	杉本 伸一
山眠るたたら製鉄よみがへり	森川恵美子
湯の中の柚子お手玉に高く高く	斎藤よし子
奥多摩や地蔵堂にも聖樹立つ	城戸崎雅崇
ふるさとは霜踏む山のその先に	中村 順次
猫代りと毛皮のコートそばに置き	松澤 博子
代替り重ねし庭の小雪かな	坂 利美
お帰りの声にほどけし寒さかな	大野 邦夫
冬の雷のち打ち込む能面師	小堀 尚美
水柱冬日を散らしたたき漁	田辺美千代
父いつも横座に居たり囲炉裏端	森 幸子
こんなにも晴れてゐる日よ葱刻む	石原ゆき子
水漬や子のぐいと立つ目の力	佐藤 慎一
クリスマス高層ビルは灯の柱	志多伯節子

2021年2月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

川音のいささか固し冬に入る	栗本 徳子
そのうちの一つは母へ木守柿	仁田 浩
病棟に母取られしよ冬の鴉	朝田 玲子
棘抜きは夫が持みの小春かな	西村みゑ子
戸を叩くは木枯しのみぞ主逝き	森 幸子
大水害の町史に遺る野分かな	川上 和昭
晩秋の湖面は白し余呉の湖	栗本 一代
白菊に囲まれ戦越えし人	加藤かず子
難民の子らにあげたし小春空	田崎セイ子
水一杯コーヒー一杯冬はじめ	知念 幸子
柊の花の香棘を忘れさせ	友永基美子
日向ぼこ猫の丸みに添うて撫で	中井 昭雄
冬夕焼天へ蹴上ぐる藁草履	前田 鈴子
目覚しを使はぬ暮し室の花	真下 章子
木の葉髪少しのおしやれゆるされよ	森 すゞ子
原木の競りのあとなる冬野かな	小寫 和
百舌鳴くや撮影待ちの侍に	河村 純子

穠穂の風吹き渡る干拓田	佐々木 成
球根に庭の未来凶小春風	益子 桂子
雁行と同じ空ゆく旅路かな	宮原亜砂美
なあんにもお返し出来ず星月夜	斎藤よし子
野ぎつねの密会らしき枯芒	南田美恵子
雪吊を広き寺領の要とす	長浜 利子
枯菊を刈りつつ香り惜しみけり	酒井 富子
初霜や下仁田葱の甘さ増し	森川恵美子
日差しきて色よみがへる秋の海	城戸崎雅崇
翁忌の湖たどり損ねたり	富沢 壽勇
般若経写し仏間の秋惜しむ	山中ひでの
身軽さは庭師の備へ冬構	坂 利美
画仙紙に墨走らすや冬ぬくし	田辺美千代
舟小屋に風遊ばせて蔦紅葉	山口 容子
腹減らすための散歩や冬浅き	齋藤 耐
夜神楽や神話の世とてありありと	荒木 昭代
冬支度屋根より下へ声の飛ぶ	大野千鶴子
水替へや金魚に詫ぶる冬の池	川村 真治
潜伏の祈りの島や石露の花	杉本 伸一
蕎麦の花やがて蕎麦粉となりぬべし	田崎セイ子

2021年1月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

燠細し終ひのときの芋煮会	仁田 浩
名月よ二重に見ゆるわが視力	川上 和昭
柿が顔に触るる近さよ鞍の上	朝田 玲子
恋しさが寂しさとなる夜半の秋	小島 和
萩焼や上臈といふ杜鵑草	栗本 徳子
留袖の重さを肩に秋の空	鈴木 春菜
金網を繕うてをり蔦紅葉	古川 邑秋
天高し城址名残りの石の数	富沢 壽勇
積上げしものの崩るる冬用意	中井 昭雄
ハロウィン名残の月を明りとし	西五辻芳子
枯萩やのぼりつめれば阿弥陀仏	栗本 一代
ひとり居の芯の芯まで虫の闇	木村 静子
秋の日や病院に置く出土壺	酒井 富子
日の射して歪み親しき榎櫃の実	長瀬 朋孝
身に沁むや新品のまま古ぶ物	中野 梓

山国や熊の冬眠またれをり
灰が消すとかオリーブの実の苦さ

長浜 利子
西村みゑ子

熊の檻の空ラのままなり通草熟る
晩稲刈り母は頭をもて田舟押す
比叡より出で十六夜が雲照らす
熊笹の尾根や脚絆の露払ひ
舟小屋に風遊ばせて蔦紅葉
秋夕映ビルの隙間の乱反射
秋うらら路地に迷うてもつこ橋
踏まれたる落葉また踏む朝の道
草深く揺れ風にゆれ猫じやらし
庭の柿かじりし頃の丸坊主
秋深し鎌を箒に変へる頃
マスクして眉濃く太く引きにけり
霧深しもののけひそむごとくなり
鬼灯や鳴る子鳴らぬ子鳴らさぬ子
投げ釣りの鋭き音や照紅葉
くまげらの居場所教へぬマタギかな
栗拾ふ縄文人の心地して
新米五キロ娘七キロずつしりと
鶯鳥鳴くお伽噺や十二月
栗拾ふ山のけものと分けあうて

真下 章子
森 幸子
片山 旭星
野木 正博
山口 容子
碓氷 芳雄
宮原亜砂美
澤田 陽代
櫛淵かりな
中村 順次
松澤 博子
坂 利美
小堀 恭子
小堀 尚美
齋藤 耐
荒木 昭代
石原ゆき子
佐藤 慎一
山中伊蘭子
杉本 伸一